

その笑顔が 希望のひかり

東日本震災から一年を迎えます。震災の復旧は進んでいるものの、原発事故は、依然として私たちに様々な影響をもたらしています。
今月号では、原発事故に負けず、前向きに頑張っているお二人の希望のひかりをお届けします。



エコー電気株式会社 業務課 ながさわともこ 長澤智子さん

今は前を向いて 歩いて行きます

「白河に工場が移ると聞いたときは、驚きと同時に、不安な気持ちで頭がいっぱいになりました」と当時を振り返る長澤さん。

エコー電気株式会社は、工業用テープ製品などを主に製作しており、震災前は、川俣町（本社工場）や広野町を拠点に活動していました。リーマシヨック、円高と生産の海外シ

special interview

妊婦健診のため通院したり、市内に買い物に出掛けたり、職場以外でも白河の生活に慣れてきた長澤さん。「病院では、まわりの皆さんに席を譲ってもらったり、コンビニでは、（妊娠）何か月ですか、と優しく話し掛けてもらったりしました。皆さんに気に掛けてもらえる、ほっとして嬉しくなります」と話す長澤さんは笑顔であふれていました。

地震、そして原発事故から一年。当時は想像もできなかったほど、生活は一変しました。

「原発事故がなかったら、川俣で震災前と変わらない生活を送っていたのかもしれない。川俣に帰りたいと思っていたころは、そんな懐かしい日常のことばかり考えていました。でも、後ろを向いても何も始まりません。白河の皆さんは、私たちを受け入れてくれました。そんな皆さんに伝えるためにも、4月に生まれる新しい命のためにも、今

フトが続く中、将来を見据え、医療関係分野の研究にも取り組みはじめた矢先に原発事故が起きました。事故の影響で、広野町は避難区域となり、工場は立ち退きを余議なくされました。さらに、アメリカでは、原発から50マイル（約80km）圏外への退避指示が出ており、顧客がアメリカ資本のため、それらの状況を受けて、移転先を探すことになりました。その結果、条件を満たす白河市に工場を移転することになったのです。高校を卒業してから10年、ずっと川俣で働いてきた長澤さんは、不安な気持ちのまま、同じ職場のご主人と一緒に白河に引っ越すことを決めました。

白河の皆さんに優しく話し掛けていただき、嬉しくなりました



▲白河で新たな一歩を踏み出した長澤さん

は前を向いて歩いて行こうと思いません」。

「引っ越してきて最初のころは、道が分からず、迷うこともありました。ホームシックにかかり、白河での生活を良い方向に考えることができなくなっていました。不安ながらも生活していくうちに、明るい兆しが見えてきました。白河で採用された人との新しい出会いや、赤ちゃんを授かったことをきっかけに、長澤さんの気持ちは少しずつ前向きに変わっていったのです。「工場の移転が決まったときに、年配の社員など、白河まで行くことができない、会社を辞めた人もいました。川俣で一生懸命働いてきたその人たちの気持ちを無駄にすることはできません。今度は私たちが支えていかなければいけないと思い、頑張っていこうと思うようになりました」。



▲白河工場（新夏梨）

◎エコー電気株式会社（菅城静子社長）

昭和34年に創立、本社は川俣町。工業用テープ製品や基板外観検査機を開発・製作。今後は医療関係の研究も進めていく。

■業務課 奥山憲一課長

原発事故の影響で、昨年6月27日、本社・広野の工場機能を白河市に移転し、白河工場の操業を開始しました。

現在、白河工場には40人の従業員が働いており、そのうち13人が白河市で生活しています。

従業員の中には、広野町にある自宅が津波の被害を受け、家族が離れ離れに住んでいる人、川俣町から通勤している人もおり、それぞれが負担を抱えながら勤務していますが、みんな前向きに働いています。

白河は川俣と比べると寒いですが、小峰城や南湖公園など、歴史を感じる良いまちで、とても生活しやすいです。

買ってもらえる人がいると信じて、良い物を作っていきます

原発事故の後、最初に取引先からキャンセルの連絡がきたときは、頭が真っ白になりました。このまますべての顧客から断られてしまったらどうしよう。実際、去年は顧客が3割ほど減ってしまいました。しかし、放射能の測定結果を渡し、安全が確認できると、これまで通り、取り引きを続けてくれた方もたくさんいました。応援のメッセージやプレゼントを送ってくれる方もいて、その方たちのためにも、頑張つて農業を続けていこうと思えました。この先、風評被害がいつまで続くのか分かりません。でも、買ってもらえる人がいると信じて、良い物を作っていきます。ここ（白河）にいただけでは叫びは伝わりません。販売会へ参加してみても、風評被害を払しょくするには、県外の人に直接、気持ちを伝えることが大事だと感じました。

遠藤さんは、同じ境遇を分かち合い、励まし合える未来塾のつながりを大切にしながら、これからも活動していきます。



▲販売会の様子

■しらかわ農業未来塾

これからの白河の農業を担う青年農業者で構成された組織。研修会や市場調査、関係機関との意見交換会等を開催しています。

special interview



しらかわ農業未来塾 会長 遠藤竜史さん

直接、気持ちを伝える ことが大事です

遠藤有機農園を経営する遠藤さん。昨年は、青年農業者で組織された「しらかわ農業未来塾」の皆さんと、東京や千葉の販売会に参加し、自分たちが持ち寄った農産物の安全安心をPRしました。お客さんから、温かい言葉を掛けてもらったときや、自分の作った農産物を手にとって買ってもらったときはとても嬉しく感じました。